

Containment Initiative ~The Deceased Operator~

Bradford

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アルファシリーズ。それはかつて存在した人形。

人の脳と人為的に作り出した体を組み合わせ、不老不死となり戦場を駆け巡る。

そしてこの物語はそのアルファシリーズの最後の生き残りであると共にある組織に所属していた元人間の物語。

2021/11/14:SCARをRM277に変更。

コラボ依頼や意見、アドバイス等がありましたらこちらに←

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid||264481&uid||336479>

目次

DATA REDACTED	1
プロローグ	5

# DATA REDACTED

C?????  
Frost

Alignment: Trident|01

Affiliation: US Army

現在存在する最後のアルファシリーズであり、特殊作戦。とりわけ、不正規戦争、心理戦、特殊偵察や直接行動を得意とする。尋問などや語学にも精通しており、爆発物や化学兵器の取り扱いも心得ている。しかし任務や仲間の安否よりも自分の生存を優先しており、生き残るためなら、命令違反や意図的な友軍に対する攻撃、敵側に寝返ることもある。

The following files are protected

ted by the administrator, authority.  
Top Secret  
by administrative authority.  
以下のファイルは管理者の権限により  
最高機密  
に分類されています

The following information is restricted by  
以下の情報は、  
??????  
によって制限されています。

The following files have been designated as Level 5 Confidential.

以下のファイルはレベル5機密事項の指定を受けています。

Any attempted accesses without Level 5 authorization will be logged and the subject staff member will be terminated.  
レベル5認可無しでのアクセスの試みは記録され、対象職員は終了されます。

Show login credentials: Level 5 clearance required.

ログイン資格を提示せよ: 要レベル5クリアランス

Authenticating certificate.  
Access granted. Have a good day,

証明書を確認。アクセスを許可。ご機嫌よう、  
?????????

Warning: Some parts of this file are locked.  
It requires an additional level 5 clearance to unlock.

警告:このファイルの一部はロックされています。

アンロックには追加のレベル5クリアランスが必要です。

Willford

???????

Allsign: Trident-01

Affiliation: SCP Foundation, MT

F Taul "Big Brother", MTF Eta-1

0 "See No Evil",

現在存在する最後のアルファシリーズであり、特殊作戦。とりわけ、不正規戦争、心理戦、特殊偵察や直接行動を得意とする。尋問などや語学にも精通しており、爆発物や化学兵器の取り扱いも心得ている。しかし任務や仲間の安否よりも自分の生存を優先しており、生き残るためなら、命令違反や意図的な友軍に対する攻撃、敵側に寝返ることもある。

SCP財団所属の機動部隊長を務めており、事案—096—A—1の際の生存者の一人と呼ばれている。機動部隊タワー1（“ビッグ・ブラザー”）が解体された後は機動部隊エーター10（“シー・ノー・イーヴル”）でTask Force Leaderを勤めていた。

#### 特筆すべき点

- ・スクランブルギアの弱点を詳しく知り、SCP—096をスクランブルギアを用いて収容した。
- ・認識災害やミーム汚染に強い抵抗を持ち、第六感にも優れている。
- ・SCP財団に所属する以前はデルタフォースに所属していた。
- ・身体的、精神的な弱点がない。
- ・選拔射手の資格を持っており、M39 EMRを愛用していた。
- ・SCP財団に所属していた際の記録はなく、どのような任務や作戦をこなしていたかは不明。

現在の所属は不明で、様々な組織に関与しているため注意が必要。

## プロローグ

ここに来てから約1ヶ月程経った。

未だに前線に配備される雰囲気はなく、ただ単に掃除や物の整理などの雑用をさせられている。それに全く寝ることが出来ない。指揮官に報告してみたが、やはり真面目に受け答えをしてくれない。

ただここに配属された時よりかはマシだと思った。

ここに着任した時に直ぐにこの仕事：雑用係をさせられた。男性型の戦術人形を嫌う人間は多いらしく、この指揮官もそうだと悟った。しかし、着任する前の話では、意見はしっかりと受け入れてくれるとも聞いていた。雑用係をさせられる事に対して反論してみた。何と無く分かっていたが、容赦なく殴り飛ばされた。蹴ったり殴ったり、拳句の果てにはその場にあつたカッターナイフで切られたりした。

普段なら容赦無く殴り返して殺せるはずだった。だが逆らえないようにロックが掛かっていた。結果あの男のやりたい放題。訳の分からない事を言いながら殴ったり蹴ったりだ。

そしてその時の副官に命じて俺の体の一部とも言える武器：RM 277を没収された。

おまけにその時の副官は自分が痛めつけられているのを見て興奮していた。

「コイツらまともじゃない。」それが初めての感想だった。

その後は傷を治した後に雑用を始めた。周りの人形の視線が嫌だったが今はもう視線を向けられる事が無くなった。

ありがたいことだ。これで仕事に集中できるからだ。

ただ、夜に指揮官の部屋の前を通り過ぎると毎日ベッドの軋む音と女の喘ぎ声が聞える。

恐らくこの指揮官は俺が気に入らない理由は“そういう事”ができないからだと考えた。

その内解体されるか何処かに異動か。この二つが俺の辿るこの先の道だった。



「後…二つ…終わったたら次は弾薬の在庫のチェックか…」  
「…その内これも終わるか」

それから数日経ったが未だに何も無い。

「…これで1ヶ月寝てないことになるな」

「次は…何すればいいんだ？」

「まあ、その内思い出すか…」

「ごめんなさい、貴方は人形かしら？」

「え？そうですけど、何か？」

ぶつきらぼうに返して、振り向く。

そこにいたのはブロンドのロングヘアに若い顔つきをした女のロシア人だった。

「ごめんなさいね。ここ、戦術人形ばかりで、人が1人ぐらいはいると思っただけどね」

「この指揮官は人より人形の方がいいらしいので」

「そうなのね、邪魔してごめんなさい、また何処かで」

そう言っって何処かに去っていく。

「何だったんだ一体…」

洗濯した服を持って宿舍の服置き場に持っていく。

自動ドアを開け、服を置き、部屋から出ようとすると…

「あ、フロストさん、おはようございます。服持ってきてくれたんですね」

「え？あ、ああ」

「大丈夫ですか？顔色が悪そうですけど？」

肩に手を置いて話しかける64式

「あら、64式じゃない。何してるの？」

「あ、PPKさん。少しフロストさんの体調が悪そうなので、話しかけただけです」

「なあ、64式、俺は大丈夫だから手をどかしてくれ」

「あつーごめんなさい」

「いい、いいんだ。それでなんだが…」

「今何時なんだ？」

「え？今は朝の8時ですけど？」

「…そうか、どうも」

歩いて部屋から出ようとする…

「まだそんな事続けているんですね」

「…」

「…どういう意味だ？」

その場で立ち止まる。

「あなたがどんなシリーズであれ、男性型と女性型の人形との違いは全くないんですよ？なのはどうしてこんな事をずっと続けているんですか？」

1ヶ月も寝ていないせいとか、疲れからまともな思考が余り出来ず、言い返してしまう。

「…これを望んでやってるとでも思ってるのか？」

「あら？だから続けて雑用係をしているのでは？」

「…そんなわけないだろ、やめれるならやめてる」

「ならやめればいいじゃ無いですか」

「いくら何でも言い過ぎですよPPKさん！彼は疲れてるんですよ？」

64式がPPKを止めるがPPKの見下した態度が気に食わない。

「こつちが黙ってれば好き勝手言いやがって…」

「…おいPPK…：歯あ食いしばれ！」

思い切り力を入れて殴ろうとするが…

ガシッ！

腕をつかまれる。

「チッ！またお前か、Mk-48」

「あら？邪魔したかしら？」

「別に…」

振り返って歩こうとするが…

「ゴホッゴホッ」

「大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ…ゴホツゴホツ…ゲホツ！」

血を吐き出す。

それを見たMk-48が俺をけり倒し、俺を踏みつける。

「ツ…」

「馬鹿だな…」

「何がかしら？」

フロスト「…突然目の前の奴が血を吐いてもなんも思わないとは…  
間抜けだなあ！」

腹に刺していた、ナイフをMk-48に振りかざす。

「チツ…！」

Mk-48は反射的によけるが、頬に傷がつく。

「ハハツ…何だ、意外とこういうのには弱いんだな…」

「にしても上手くだませて良かったよ…」

腹の辺りの服が赤くなっている。

「フロストさん貴方なにしたんですか!？」

「簡単だよ。胃のある部分に思い切り刺して出血させたんだよ」

「悪いが、俺はお前らがどうなろうとどうでもいい。自分さえ生き残  
れればな…」

「生き残れるなら何でもしてやる。味方をわざと殺したり、情報を  
売ったり、裏切ったりもしてやる」

「俺はお前らなんかとは違う。お前らなんかとはな…」

「どういう意味よ…」

Mk-48の目が真剣になる。

「そのうちわかるよ…」

そう言っつて血を流しながら部屋から出ていく。

「俺はお前らなんかとは違う」。一体どういう意味なの…？」

「久々にここまででしたな。ここまでしたのは世界大戦が始まる前ぐら  
いか」

暗い自室の中で呟く男。

その男のベッドには数人の女と安物の酒の缶が転がっていた。

ピロン。

男の携帯が鳴る

「ん？何だ？」

彼の携帯にはフロストの顔写真と共に文章が添えられていた。

『E01基地に所属するRM277をS09特殊前線基地に異動させる事を要請する。S09特殊前線基地指揮官：ナタリア・メルニク』

今日は何故かよく寝る事ができた。それもかなり。

「朝か…」

コンコン

「誰だ？」

「私です。指揮官が貴方の事を呼んでいました」

「…チツ、分かった直ぐに行く」

「…SCAR—H、入ります」

指令室に入るとそこには制服を着た中年の男…指揮官と数日位前に会った女の指揮官だった。

「SCAR、お前は今日付けでE01基地からS09特殊前線基地に異動する事が決まった」

「…そうですか」

冷たく返す。

「ほら、お前の武器だ」

「だいたい1m位のトランクケースを取り出す。」

「…」

トランクケースの中にはRM277とサイドアームのMk. 23があつた。

黙って自身の体の一部であるRM277を取り出し、細かくチェックする。

「貴方、ここに来る前はかなりの腕だったそうね」

「…まあ、約1ヶ月のブランクがありますけど」

「おっと、自己紹介が遅れたわね、S O 9 特殊前線基地の指揮官ナタリア・メルニクよ。ナタリアでいいわ」

手を止め、指揮官の方を見て言う。

「…ええ、よろしくお願ひしますよ、ナタリアさん」

冷たく、言い放つ様に。

フロスト（一発でも良いから6・8mmか45ACPがあればここで撃ち殺せるのに）

ここでコイツを殺してやろうと思ったが、いつか死ぬだろうと考え、止めた。

「さてと…武器を返したところでS O 9 特殊前線基地に異動となる。準備をしろ」

「解りました」

それからは新しい指揮官のナタリアとも口を聞かずに黙って荷物を纏め、着替えた。

「…」

左肩についているワツペンの上からバンダナを巻き、隠す。

「えーっと…準備できた？」

「ああ」

歩いて最中にPPKや64式、Mk48と目が合ったが何も言わずに歩き続けた。

「…ねえ、貴方確か…アルファシリーズよね？」

S O 9 地区に向かう指揮官の運転するハンヴェーの中で唐突に聞かれる。

「…ああ、そうだ」

「…そう。なら貴方は私達を恨んでるのよね？」

「…恨んでないけども？」

「やっぱり。道理であった時も冷たかったのね。ま、私はどうでもいい

いけど」

「暫くの間は私とは別の指揮官のところまで戦ってもらおうわ…って言うても、私の双子だけどね」

「…そうか」

「ん？ええ、そう。」

「担当地区が同じだからね。S09には二人指揮官がいるのよ。どっちがいなくなってもいいようにね」

「…それはいいんだが、どうして俺を異動させることになったんだ？」

「えつと…ペルシカって人、知ってる？」

「ああ、知ってるよ。あのよくわからん猫耳の生えた不健康そうな細身の女だろ？」

「え、ええ、そうよ…」

それから10分ぐらい走った先に

「見えてきたわよ」

「あれがか？」

「ええ、そうよ」

「…Frontlineね。楽しみだ…」

「？どうしたの？そんなににやけて」

「…にやけてたか？」

「ええ、なんか…戦う事を楽しみにしてる感じよ。そのにやけた顔」  
「…そうか」

沢山の廃墟となったビルが見えてくる。

Welc前ome線 toに theよ frontlうinesそ.  
とても楽しみだ。